

## 「金を求めて」の旅 その5

(2013入学 高松俊和)

今回も山梨県への旅です。前回は甲州金山について大雑把に捉えただけでした。甲斐国内でも規模が大きい山梨県北東部にある黒川金山は1986年から、旧下部町の湯之奥金山（中山、内山、茅小屋の三金山の総称）は1989年から総合調査が行われた。この調査資料を基に今回は金山と稼業者について考えてみました。

### 1. 武田信玄への想い

生粋の山梨県人の方に聞くと、「武田信玄と呼び捨てにはしない。“しんげんさん”とか“信玄公”と呼ぶ。」そして「殿様と言えば、信玄公です。江戸時代、甲州は幕府直轄領で甲府勤番制のため領主は江戸詰め。信玄公は戦も強かったが、民衆のために政治を行った戦国武将です。」と郷土愛溢れるお話を数多くされる。

昨年信玄公生誕500年事業は活況を呈したとの事で、市の広報にも「500年前の11月3日、この甲府で産声をあげた武田信玄公。遙かな時を超えて、今もなお、私たちの心を惹きつけるのはなぜでしょう。領土を守るために、労をいとわず、周りへ耳を傾け、どうしたら甲斐を豊かにできるか模索し続けた生涯でした。生誕記念を迎える節目に、そのたぐいまれなアイデアと、優れた実行力をもつ我らが誇る郷土の英雄をあらためて振り返ってみませんか。」とのお知らせ。

「武田信玄は、スーパーマンなのか？いくら能力が桁外れでも、1年365日、24時間休みなく働いても無理。時は、下剋上の戦国時代。任せられる有能な部下がいたら、反対にいつ裏切られるかわからない。」とは凡人である私の感想。

山梨県民を揶揄するわけではないが、“武田信玄偉人論、信玄の神格化”はいつからなのか？下記の資料が影響しているとも思える。

「甲陽軍鑑」：江戸時代のはじめに書かれた講談的な軍記もの。時代小説とも言える？

「甲斐国誌」：甲州の地理歴史を記録しようとしたが、編集されたのは戦国時代から二年以上経っている。正確な史実なのか疑問。

### 2. 武田家と金山の通説

黒川金山は、父信虎が発見し信玄が地元の名主（なぬし）に開発させた。また、戦国時代の武田氏の繁栄と滅亡に関しては、戦には軍資金が必要。甲斐はどこを見ても山ばかり。越後の米が上杉氏の力の源泉。甲斐の経済力の源は金。そして全盛期は信玄の時代で、金を求めて領内各地や隣国で新たな金山開発が行われた。しかし、子勝頼の時代に金は枯渇。財力が減少し長篠の合戦でも敗れ、その後再興できず武田氏が滅亡。甲州金が武田軍団を支えていたのだと伝えられている。政治史からのみ見た金山の捉え方ではないのか。

### 3. 金山開発はいつから

黒川金山では発掘調査の出土遺物や地元法光寺の建立時期から山伏・修験者などによりほそぼそとした砂金採取はかなり早い時期おそらく十二世紀から行われていたと推定されている。険しい山々を歩き続ける彼らなら山奥の砂金採取は可能であろう。しかし、資本、人、道具、技術が十分ではなく、本格的な採掘はやはり鉾山町が形成された戦国期。「砂金から山金へは、まるで桃太郎からかぐや姫のよう。川に流れてきた桃を拾う。山で竹を切って姫を得る」と妻の感想。時代が違うし背景も違うが全否定できない自分が悔しい。

### 4. 武田家の所領

武田家の領地（図1）は、父武田信虎の時代は甲斐一国であったが、信玄治世時には川中島合戦をはじめとする戦に勝利して所領を拡大、信玄の子勝頼の時代に最大となる。甲斐国 石高約 25 万石前後、信濃国 石高約 55 万石前後、駿河国 石高約 15 万石前後 上野国の一部 石高約 10 万石前後、美濃国の一部 石高約 10 万石前後、遠江国の一部 石高約 10 万石前後、三河国の一部 石高約 5 万石前後、計 1 3 0 万石とも言われている。しかし、甲斐国行政区分（図2）のうち武田家臣団の有力国衆である穴山氏が湯之奥金山のある河内領、小山田氏が郡内領の領主。武田家の指令が直接届かない、いわゆる二重支配と考えられる。通説のように金山が武田氏に軍資金の源であるには、武田氏の直轄領である必要が生じる。甲斐国内における金山の場合には戦国大名武田氏との関係のみが独り歩きし、なかば伝説化していた。また、金の産出量は減少しつつあったが、江戸時代まで操業が続けられた。

### 5. 甲州金山の鉾石

天然産の金粒は、多少とも銀を含んでいる。銀を 20%より多く含む金はエレクトラムと呼ばれる。エレクトラムは銀分を減らす精錬工程を経て、はじめて金として通用する。黒川他二つの金山についての金粒の品位 86~99.6%で平均 93%。鉾石の金銀比率は 77~88%で平均 84%。破碎と粉碎の工程で砂金同様の比重選別をすれば金の精練は必要なく加熱すれば玉状の金になる。金堀たちが露頭に近い酸化富鉾帯（露頭掘り）を中心に採掘し有望な鉾脈の少ない深部（坑道掘り）までの開発は行わなかった理由であろう。

### 6. 金山衆についての先行研究。

戦国時代の武田氏所領内の金山（図3）で採金にあっていた鉾山主は「金山衆（かなやましゅう）」と呼ばれていた。古文書にも甲斐・駿河の鉾山の稼業者を金山衆と記述がある。

先行研究では

- ① 金山衆は、金堀人夫を従える棟梁的存在としての鉾山経営者であるとともに、領主と主従関係を結び、戦争に参加する武士であった。一つの鉾山に複数の金山衆が率いる集団

がいて、それぞれが掘り間を持ち採掘を行っていたらしい。大名の金山経営を担当する役人ではなく、半独立的な集団で、税または運上金を払い稼業していたらしい。

- ② 金山衆は金山奉行であったように記したものもある。近世諸藩の金山奉行は、藩より派遣されて鉱山支配に任じた藩役人。金山衆は、間歩・堀場の所有者であり稼業主であり山主（山師）である。甲駿地方では、彼らは領主と被官関係をもつ名主的武士であり、金山衆は山主集団であるとともに武士団を形成していた。

以上が主な研究結果である。要するに、金山衆は基本的に武士で武田の家臣団となる。となれば、次の疑問が生まれる。

## 7. 金山衆は武士か？

まず、残されている金山衆に関する古文書を見ると、武士であれば、あるべき宛名に「殿」が入っていない。武田氏からの文書でも相手が武士であれば敬称文言がつく。穴山氏の河内領では武士、市川氏あて金山掛の任官の文書には「殿」が入っている。敬称なきは武士扱いではない。従って、金山衆は武士ではないし、武田氏と被官関係もない。

## 8. 武田氏と金山衆

通説では、偉大なる信玄像が強くある。金山に関しても、信玄が職人を引っ張ってきて開発し、甲斐の富の源泉を作り上げた。しかし、金山は金山衆の所有であり、信玄が発見して与えたものではない。駿河深沢城攻略の時、彼らの技術に着目して、金山衆に地下から穴を掘って攻め開城させた。この戦で特別に奉公したので褒美をやると黒川金山衆の中心となった田辺四郎左衛門に文書を出している。湯之奥の中山金山衆にも褒美が出ているが、こちらは、名はなく中山の金山衆十人となっている。坑道を掘り、掘り出した金鉱石を粉々にし、金を選別し、溶解する。一連の作業をするには、多くの道具とかなりの人数や手間が必要。金山経営をしている金山衆は、商売をしたり、水田を持ったりして財力がなくてはできない。つまり、経営者である金山衆は、ある程度の地位や金がない人ではできなかった。そういう人々が全国を歩き回って金が出る場所を見つけ、人を組織して金を掘り出す、経営者のようなことをしていた。金山衆の子孫の家は大きく、ほとんど土豪・武士の家と変わらない。多くの人を抱えていたので、棟別の諸役免除が大きな特権。商売もしていたので通行税の免除も意味がある。

## 9. 金山衆には二つのタイプがあったのではないか。

- ① 古文書に名を連ねている金山衆は、戦争に参加し恩賞を得、里に広い屋敷地を確保している者たち。金山衰退後も当然その地から動かず、産金減少の救済処置も受けていない。すなわち彼らは、在地土豪たちで金山経営に資本を投下した者たちではないのか。この金山衆の多くは農・鉱兼業であっただろう。農業は鉱山で必要とする食料の供給として。兼業だとするなら、手代が山中で金掘りの指図をしていたかもしれない

し、農閑期を中心に季節的金山稼業が行われていたかもしれない。このタイプを名主金山衆と呼ぶことにする。

- ② 武田時代には名主金山衆に仕えていた堀子層は金堀のみを本分とした者たちで、各地の鉱山を渡り歩く鉱山職人が本来の金山衆であろう。一部を除き戦争には積極的に参陣せず、当然恩賞も得ていない。反面、天正五年の産金減少による救済処置は得られている。十六世紀後半に山を下りた金山衆が江戸初期に再び山に登り産金活動をしている。このタイプを職人金山衆と呼ぶことにする。

## 10. 移動する金山衆

信玄没後、金山の産出量も減少し、金山衆はその後の進路の選択を迫られる。塩山市などに田畑家屋敷を保持していた各地の名主金山衆たちは、当然帰農したらしい。実際は帰農というより兼業の鉱山稼ぎの部分が欠落しただけなのかもしれない。甲州からは、江戸時代に佐渡金山をはじめ多くの金山奉行を輩出している。出世した名主金山衆と考える。

一方、里に下らない、あるいは下れない専門性の強い職人金山衆及びその子孫は、稼業の一部として土木工事の請負をした。猿橋（図4）の架け替え、佐久五郎兵衛用水や箱根用水工事など。硬い岩石の破碎や坑道造りの鉱山技術が土木技術に生かされたことは、想像に難くない。過酷で危険を伴う作業に従事しながら、技術の蓄積と伝承に努めた多くの名もなき職人たちに敬意を表する。中世から近世への過渡期のなかで、多くの立所を未分化のままかかえたあり方から、農民として、武士として、鉱山稼業者として、特殊技能を持った職人として、身分の明確化を果たさなければならなかった。金堀のみの課題ではなく、この当時の人々が担った課題であった。

さて、黒川金山は麓の村から徒歩で約4時間、湯之奥中山金山は約3時間かかる。発掘された平坦地は、150~300カ所。採掘、粉碎、選鉱、溶融の作業は当然この山奥。最低数か月はここでの生活となる。黒川千軒との言い伝えられる鉱山町は、現場作業や賄いなどの雑務者たちで最大時には人口1000人近くになろう。鉱山の世界は封建時代の地縁的束縛から離れた人工都市で、あらゆる物資が金銭で交換、入手される近代的な経済活動を先取りした世界であり、実力尊重、実利主義、自由への希求といった価値観を生み出す土壌でもあった。次の時代に開花するつぼみが数多く生まれたとも考えられる。今回の拙稿で黒川金山と湯之奥金山の区別が明確ではないと自省しています。

信玄公の偉業として知られる治水工事の「信玄堤」がある。この件は、次回とします。次の旅は、いよいよ佐渡金山に向かう予定です。と思ったら、湯之奥金山博物館から全国砂金地図（図5）が完成との知らせ。昨年訪れた時はまだ数県が空白地であったのに。「すべて巡るには、余命が足りないかも」と思いつつ、心は佐渡へ。

信玄公を尊敬し、愛する皆さん、ごめんなさい。郷土愛を理解しない薄情な私の望みは、

甲州の他の金山調査や古文書の発見により「やはり信玄公は、英雄であり天才であり民を思う殿様だった。」となることです。

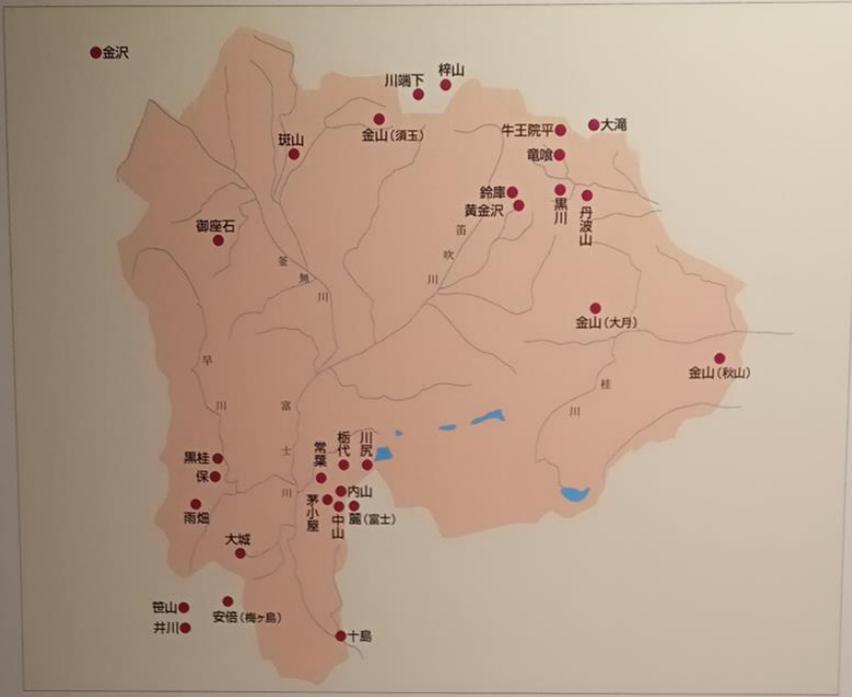


(図1) 武田氏所領



(図2) 甲斐国独自の行政区分

# 戦国期の甲州金山



(図 3)



(图5) 47 都道府県砂金地図 (湯之奥金山博物館)



(图4) 猿橋

広重 「六十余州名所図会」 猿橋

